

第一回 サケマス増殖談話会

1994年6月(於札幌)

生物多様性と サケマスの人工孵化放流事業

水口 憲哉 (東水大)

【目的】

漁場破壊と乱獲によって損なわれた水産生物の再生産過程を補う技術的対応の一つとしての人工孵化放流事業は自然の維持よりは、むしろ、資源利用の増大を目的とするがゆえに、生物多様性の維持という面においては種々の問題を生ずる。

長良川のサケマスにおける種の多様性の究明と維持への関心を入口として、日本のサケマス類人工孵化放流事業の歴史における生物多様性の変容についても検討する。

【方法】

①サケマスの現状に関する長良川流域関係者からの聞き取り調査。②岐阜県水試および関係漁協等の資料をもとに木曾三川におけるサケマスの放流漁獲量と遡上漁獲量の推定(白木谷 1993)。③長良川のアユやオイカワに関してこれまで明かにされた知見の検討。④中野正貴(第15報告)の用いた資料を用いて、マス、ヤマメ、アメノウオ、サケ等について河川別、県別漁獲量の経年変化を検討する。⑤北洋資源研究協議会(1956)“北海道沿岸に於ける鮭鱒漁獲高”等によるサクラマスの漁獲量と遡期の検討。

上記の検討を行うに当たりいくつかのことを前提とした。

- 1) アマゴとヤマメの現在の分布域に関する知見をもとに、混乱と不明のあるままマスと一括されている統計資料をサケマスとサクラマスおよびカラフトマスに2分した。
- 2) 漁獲量変動を考える際には母川回帰を前提として河川毎の個体群を単位群とした。
- 3) ここで用いた公式統計はケタの違いで見分にはある程度検討に耐え得ると考え、大きな変化、相対的關係の変化を中心に検討した。

【結果と考察】

1891年 サケマスと推察されるマスは14県で約41トン漁獲されていた。そして、1927年から5年間の平均漁獲量は122トン(16県33河川)あった。しかし近年の県統計や農水省統計では、河川におけるさく河性さけ・ます類の3種中にさつきますの項目はない。今回の調査では1990年木曾三川では20トンの漁獲があり、その半分が長良川である。そしてさらに20トンのうち15トンが長良川由来の遡上漁獲量と考えられる。長良川河口堰を運転すればサケマスの遡上が阻害される可能性を示唆する調査結果(新村 私信)もある。そうすれば、木曾川、淀川、天竜川で行われているような放流漁獲量のみ reliant 漁獲になってしまう。その段階で現在長良川で認められているサケマスの二型(ガワマスとアマゴマス)が放流や遡上とどうかかわっているかが問題となる。このような経過をサケの人工孵化放流事業の歴史におけるサクラマスやカラフトマスとの関係、サクラマスに見られる遡上期の二様性の変化等との関連で生物多様性の観点から検討する。